
受験戦争

西内京介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

受験戦争

【Nコード】

N8691Z

【作者名】

西内京介

【あらすじ】

都内屈指の新学校で、受験を控えた三年生が自殺した。警察は受験のプレッシャーによる自殺と断定し捜査は打ち切られようとしたが、疑問を抱いた刑事館林は、ちょうど教育実習で訪れていた瀬郷洋輔に捜査協力の依頼をする。自殺した生徒は、成績も学年トップで、このままいけばどの大学にも入学できるはずだった。それなのにこの時期での自殺は、正直解せないというのだった。進めていくうちに、捜査線上に浮かび上がってきた二人の容疑者。二人とも、成績同率二位を誇る実力者だった……。

次々と浮かび上がる、それぞれの思惑。果たして自殺か、他殺か。全てのピースがそろった時、驚愕の真実が明らかになる。

序章（前書き）

どうも。かなりしばらくぶりの投稿になります。西内です。

この小説は、自分の中でもまあまあ納得のいく作品に仕上げるこ
とができた、と思います。三人称で長編を書き上げられたことで若
干テンションがあがっているからかもしれませんが。

皆様に最後まで読んでいただければ、これほどの幸いはありません。
ん。

序章

青年は目を閉じ、自分の生命を確かめるように、ゆっくりと息を吐いた。両手を広げ、風を全身で受け止めようとしている。

気持ちいい――。

口には出さず胸中で呟いた後に、青年は再び目を開け眼前に広がる光景を、まるで無邪気な子供のような気持ちで見下ろしていた。

この町は、なんて綺麗なのだろう――。

青年は思ったことを口には出さず、胸の内で呟いた。口にしたところで、自分の気持ちを分かち合う人なんてこの場にはいないのだからという、諦めにも似た思いがあったからだった。

一瞬、強い風が吹きつけ青年は危うく落ちそうになったが、なんとかフェンスの網を掴み、堪えた。

風なんかには殺されてたまるか、どうせ死ぬなら自分で――。

その決意は固かった。揺らぐことなく、遺書を書き、屋上のフェンスを乗り越え、ようやくここまでやってこられたのだ。風のせいで、生涯を終えることがあってはならない。

しかし、後一步。後一步を踏み出すことが出来なかった。

もう少しなのに――。

悔しさと、自分の情けなさに涙を堪えきることができなかった。

まさか、後悔しているのか――。

心の底から涙を流している自分に気づき、自問した。残念ながら、答えを出すことは出来なかった。

もう十分じゃないか――。

その時、学ランのポケットに入れてあった携帯が震えた。誰からか、着信が入ったのだ。

自殺する前に人と話すのは、あまり気が進まなかった。人と話すことにより、死への躊躇いが生じてしまう可能性があったからだっ

た。

どうすればいいか、そう迷っていると携帯が鳴り止んだ。慌ててポケットに手をつ込み、携帯を取り出した。画面を開いて、かけてきた人物を確認する。

それは、この学園で唯一の友達からの着信だった。

数秒迷った挙句に、青年は自ら友達の携帯に掛け直した。

「もしもし……」

会話は数分続き、青年は携帯を切って夕空を仰いだ。

あいつは何を考えているんだか――。

口元に微笑を浮かべながら胸中でそう呟くと、フェンスに背中を預けて携帯をポケットにしまった。

本心から言うと、友達からの着信は嬉しかった。けど、やはり複雑な心境であった。

揺らぐ決意――ここまで来たのに、また引き下がることになってしまうのか。

顔に、いよいよ突き刺さるような痛みを伴う風が吹いた頃、後ろのほうでドアノブが回る音がして、反射的に青年は振り向いた。

ドアは、まるでスローモーションのようにゆっくりと開いていく。青年はそれをじれったく思い、齒軋りをした。

早く来いよ――。

やがて、ドアは完全に開かれた。

第一章

不意に、今まで聞いたことのないような、不快感極まりない音が耳に入ってきた。

瀬郷洋輔は読んでいた本を閉じて、ゆっくりと音のした方向へ顔を向けた。

音が聞こえてきたのは、ここからそう離れていないな――。

そう思い、席を立て洋輔は図書室を出た。

洋輔は某有名大学に通う二年生で、教育学部に所属している。専攻は歴史。教育実習生として、洋輔は今日、都内でも屈指の進学校、宝徳学園へとやってきた。

今日は初めてということあって、教室の後ろで世界史の授業を見学しているだけだったが、早くも洋輔の心は折れかけていた。

生徒の出来が、想像以上によすぎるのだ。自分よりも、もしかしたら頭がいいかもしれない――そんな不安が、洋輔によぎった。高校生より頭が悪いと示しがつかない。そう危惧した洋輔は、閉館時間のギリギリまで、宝徳学園の図書室で勉強しようと考えたのだ。

その最中に、遠くから肉の潰れたような音がしたのだ。集中力は途切れ、同時に洋輔の好奇心を駆り立てた。

宝徳学園の敷地面積は広大なため、まだどこに何があるのか把握できておらず、図書室を出てから洋輔は早速迷った。自分がどこを歩いてきたかさえ、記憶が曖昧だった。

とりあえず、出てきたからにはあの音の正体を突き止めなければならぬ。そんな使命感にも似た思いを抱きつつ進んでいると、窓の向こうに人だかりが見えた。

「なんだ？」

目を凝らして、人だかりをしてみる。

宝徳学園には三つの校舎がある。一二年の教室が主の、第一校舎。三年の教室と、進路のための資料室が設けられている第二校舎。図書室や保健室、食堂などがあるのは第三校舎で、この三つの校舎は縦に三列で並んでおり、二階の渡り廊下によって繋がれている。洋輔がいるのは、第三校舎の一階。人だかりがあるのは、第三校舎と第二校舎の間に位置する中庭である。

洋輔は足早に人だかりを目指した。

外へ出るための通用口を開き、今度は駆け足で人だかりのもとへ向かう。

数十人の生徒たちは、真ん中にあるものを取り囲むようにして集まっていた。

「なんだよ……これ」

動揺する声が、ちらほらと聞こえてきた。中には、嗚咽も聞こえてくる。洋輔の好奇心は、それに比例するようにますます高くなっていた。

洋輔は、生徒たちが取り囲んでいるものは何なのか覗こうと背伸びをしてみるが、如何せん身長には恵まれていなく、しかも前にいる男子生徒の身長がかなり高いため、何を取り囲んで動揺しているのか見えなかった。

「あ、先生」

一人の女生徒が洋輔の存在に気づき、振り返って声をかけてきた。その女生徒のことはよく覚えていた。今日の昼休み、声をかけてきた女の子だ。

宝徳学園は先ほども説明した通り都内屈指の進学校で、生徒たちはお互いをライバル視しており暗い子が多いのだが、声をかけてきた女子は他の生徒たちとは正反対の明るい子で、食堂でメニューを眺めていた洋輔に、気さくに声をかけてきたのだ。そのため、彼女のことは洋輔の記憶に強く残っていた。

そんな彼女が、今泣いているのだ。目は充血しており、今も頬に涙が伝っている。どうして泣いているのか、洋輔には皆目見当がつか

なかった。

心配になった洋輔は、生徒たちを強引に掻き分けて取り囲んでいたものを見た。

それを見た瞬間、絶句した。

洋輔の目の前には、血の池が出来ていた。内臓やら脳が飛び出ている物体が、そこにはあった。見る限り男子生徒のようだが、学ランがなければおそらく判別がつかなかっただろう。それほどに、凄惨な死体だった。これはいったいどういうことなのか。

状況をよく理解できず、洋輔は頭の中で瞬時に様々なことを思い浮かべた。

その中の一つに、投身自殺という四文字がよぎり頭上を見上げた。唯一、第三校舎には屋上がある。そこから、この男子生徒は飛び降りたというのか。

そう考えると、途端に眩暈が襲ってきて、膝をついた。洋輔に声をかけた女子は短い悲鳴を上げ、前にいる男子生徒は彼女の悲鳴に驚いてこちらを振り返った。

「先生、大丈夫？」

女生徒は、手に握り締めていた紙を丸めてポケットにしまうと、心配そうな声を上げて洋輔に駆け寄った。その声に若干の安心感を抱きつつも、やはり心の中にある不快感を払拭することは出来なかった。

図書室で聞いた肉の潰れる音の正体は、この男子生徒が飛び降りて地面に衝突した時の音だったのだ。

そう思うと背筋に悪寒が走り、吐き気がこみ上げてくる。洋輔が口に手を当てると、女生徒はそれを察して背中 hands を当て、さすり始めた。周りの生徒たちは、洋輔達に注目している。

「どうしてこんなことが……」

鼻息を荒くしながら、洋輔は心の底から振り絞るように言った。

「おい、どうしたお前たち」

不意に、遠くから野太い声が飛んできた。生徒たちは、声の主を

振り返る。

近づいてきたのは、生徒たちから恐れられている体育担当の教師、山田哲郎だった。

この高校に通う生徒たちは勉強ばかりを必死に取り組み、運動部は一応存在するが所属している生徒は少ない。

つまり皆、体育が嫌いなのだ。

しかし山田は、体育の見学を相当な理由がないと認めなくて、生徒たちは嫌々体育の授業を受けている状況だ。生徒たちが嫌うのも無理はない。

そのゴリラみたいな顔と、身長百八十センチという大柄な体格がまた、生徒たちに別の恐怖を与えているといえる。

「何があった、ええ？」

生徒たちは萎縮して、山田に何も話そうとはしない。

「あれ、瀬郷君。どうした？」

女生徒に背中をさすられている洋輔を見た山田は、一瞬にやついた表情を浮かべ、中腰になって訊いて来た。

「いえ……あの……」

洋輔も、上手く説明することが出来ないので、代わりに男子生徒の自殺死体を指差した。怪訝そうな表情を浮かべつつも、山田は指さされたほうに顔を向けた。

男子生徒の自殺死体を見た瞬間に、みるみる山田の表情を青ざめていき、先ほどまでの威勢は感じられなくなった。

「あ……あ……」

口をパクパクさせ、山田も男子生徒の死体を指差していた。その光景は滑稽だったが、残念ながら洋輔もそれと同じような状態で、笑える立場ではなかった。

「と、とにかく、先生に知らせないと」

独り言のように呟くと、山田はどこかへ走っていった。職員室へと向かったのだろう。

「先生、とにかく保健室へ行こう」

女生徒に優しく声をかけられ、洋輔は情けない気持ちになりながらも、頷いた。今はとにかく休みたいのだ。

体を支えられながら、洋輔は保健室のある第三校舎へと戻った。

第二章

「先生って、ついていないね」

保健室に入ってから、棚に並べてある薬品を眺めていた女生徒は、呟くようにいった。

「何が？」

気持ち悪いせいもあって、洋輔はぶっきらぼうに言った。

「だって、教育実習に来たのにこんな事件に出くわすんだもん」

女生徒の言葉には答えず、洋輔はしばらく辺りを見渡して、手近にあった椅子を引き寄せ座った。

「確かにそうだな」

改めて女生徒の言葉を考えてみると、納得のいく部分があった。

洋輔は、一ヶ月とはいえ教師の体験をするために宝徳学園へ赴いたのだ。高校教師というのは、中学生の頃からずっと抱いていた将来の目標でもあった。昨晩は、楽しみと不安でほとんど寝付けなかったぐらいである。

待ちに待った教育実習の初日に、こんな事件に出くわすなんて誰が想像できただろうか。洋輔は狼狽を隠すことが出来なかった。

「あれ……自殺だよね」

女生徒は依然薬品を眺めながら、後ろに座っている洋輔に訊いてきた。女生徒の口調には、まるで自分に言い聞かせるかのような響きがあった。

彼女自身も分かっているはずだ。あれは飛び降り自殺のなにものでもないということを。分かっているが、誰かに聞いたかった。洋輔には、そのように見えた。

女生徒の肩がかすかに震えているのに、洋輔は気づいた。そういえば、死体を見ていた彼女の目は赤かった。泣いていたのだ。

死体を見たから彼女は泣いたのか。女の子だから、それが普通の

反応なのかもしれない。実際、他の女生徒からも嗚咽が聞こえた。しかし洋輔は、はっきりと根拠があるわけではないが、女生徒が泣いたのは、死体を見た以外にも何か特別な理由があるような気がしていた。

洋輔が何か口を開こうとしたと矢先、奥の部屋から養護教諭の松平邦和姿を現した。その表情は、険しかった。

松平はオールバックにして髪を後ろにまとめており、山田に勝るとも劣らない体格をしていた。昔、いかにもスポーツマンだったという風格を漂わせている。洋輔は、松平と接するのに若干の抵抗を抱いていた。

「はい」

片手に持っていた物を、松平は洋輔に差し出した。それは、一粒の錠剤だった。

「吐き気が止まると思うから」

「けど、いいんですか。勝手に飲んじゃって」

他人から貰った薬を服用してはいけないと、何回か保健の先生に注意されたことがあるのを、洋輔は思い出す。

「大丈夫、大丈夫。市販だから、誰が使っても同じだよ」

宝徳学園には似つかないほど、松平の性格は楽観的であった。

「しかしまあ、驚いたね。生徒が自殺なんて」

松平がベッドに腰をかけた時、軋む音が保健室中に響いた。その音に洋輔は大げさに肩をびくつかせたが、薬品を眺めたままの女生徒は無反応だった。

「佳代ちゃん、詳しい話を聞かせてくれないか？」

と、松平は女生徒のほうへ顔を向けた。佳代と呼ばれた女生徒はようやくこちらへ振り向いた。佳代は、ぎこちない笑顔を浮かべていた。

「私、他の生徒たちのように中庭で勉強していたんです。そしたら突然、耳に不快な音が入ってきて、見たら人の死体があって……」

喋っていくうちに感情が高ぶってしまったのだろう、笑顔を崩し

彼女は両手で顔を覆った。松平は後悔した表情を作り、再び洋輔のほうへ顔を向けた。

佳代はとっくのとうに限界を迎えていた。さきほど薬品を眺めていたのも、気持ちを紛らわすためだったのだろう。そして振り返った時、彼女は笑顔を浮かべていたが、やはり無理やり取り繕ったものだった。こちらに悟られまいと、懸命に振舞っていたのだ。

そんな彼女を、洋輔は不覚にも愛おしく思ってしまった。その感情の正体が果たしてどのような類のものなのか、幸いにも洋輔はつかめていなかったが、気づくまで最早時間の問題だった。

「しかし、どうして自殺なんか……」

「君は、自殺と断定しているようだね」

「は？」

松平は意味深な表情を浮かべた。

「自殺ですめばいいんだけどね」

「どういことですか？」

洋輔が訊くと、松平は突然我に返った顔をして、やがて表情を和ませ言った。

「中年の、独り言だよ」

そんなこと言われても、洋輔には松平の言葉を独り言として聞き逃すことなんかできなかった。

自殺じゃなければなんなんだ――洋輔は、心の中で憤慨した。

「そういえば、君は今日来た実習生の一人だよね？」

「え、あ、はい」

唐突に話題を変えられ若干戸惑ったが、洋輔は頷いて言った。

「ついていないね、一日目だというのにこんな目にあって」

不謹慎だが、洋輔は吹き出しそうになった。佳代と同じ事を言っていたからだった。

「死体を見て、気持ち悪くなったのか」

松平はじつと洋輔の目を見つめながら、訊いてきた。洋輔は見栄を張ることなく、黙って頷いた。

「そうか」

頷きながら、松平はゆっくりと洋輔の手のほうへ視線を移動させ、しまったという表情を浮かべた。

「ごめんね、忘れていた。水だよ。そうだよ、水だよ。水がなきゃ、薬飲めないよね」

言いながら立ち上がって、松平は奥の部屋へと姿を消した。

正直言うと、洋輔はこの薬を飲むのに躊躇いがあった。市販といえども、他人から渡された薬はやはり飲む気にはなれなかった。

「ねえ、先生」

不意に、佳代は声をかけてきた。昼休みの時に声をかけてきた彼女とは思えないほど、その姿は憔悴しきっていた。

その様子に、洋輔はかすかな違和感を抱いていた。

「私……どうしたらいいのかな？」

佳代が何を言っているのか、意味が分からず洋輔が顔をしかめていると、勢いよく保健室のドアが開いた。

ドアのほうへ振り向くと、そこには息を切らした男子生徒が立っていた。

「佳代！」

男子生徒は佳代の名前を叫び、堂々とした足取りで保健室へと入ってきた。

真ん中へ来た辺りで、男子生徒はようやく洋輔の存在に気づいたらしく、嫌悪感を露にしたが、それでも佳代のほうへと近づいて行った。

「何よ」

佳代は今にも泣き出しそうな顔をしている。声も震えていた。

「ここに入ったところを見て、来たんだ」

そう言うと、男子生徒は佳代の腕を掴み無理やり連れて行こうとした。

「ちょっと、何よ！」

佳代は激しく抵抗したが、男子生徒の力には太刀打ちすることが

出来なかった。

「俺と一緒に来るんだ!」

「離して!」

「ちょっと、君」

見かねた洋輔は、男子生徒のもとへ行き佳代から引き離れた。

「何すんだよ、おっさん」

「おっさん、って」

俺はまだ二十一だぞ、という言葉が喉まで出掛かったが、ぐっと堪えて大人な対応を心がけた。

「彼女嫌がっているぞ」

「俺にはそう見えないね」

この自惚れている男子生徒を、思いつき罵ってやりたいという衝動を何とか抑え、無感情で洋輔は言った。

「君は彼女のなんなんだ?」

「どういう意味だよ、それ?」

男子生徒は食って掛かってきた。

「お前、佳代の彼氏気取りか?」

宝徳学園の生徒とは思えないほど、男子生徒の気性は荒く幼稚だ、洋輔はそう思った。相手にするだけ、時間の無駄かもしれない。

「俺はな、佳代の――」

「赤の他人だよ、こいつ」

男子生徒の言葉を遮り、佳代は驚くほど冷たい声で答えた。

「な、何?」

「うっさい、本城」

変わらぬ冷たい口調で、佳代は本城と言う男子生徒に、突き放すように言った。

「本城って……」

動揺を、本城は隠そうとしなかった。察するに、冷たくされたのが驚きだったのだろう。

洋輔は、本城と佳代の関係性がつかめなかった。

「なあ、お前――」

「止めて！」

無理やり引き寄せようとする本城の手を、佳代は叫びながら振り払った。その時、ポケットから丸められた一枚の紙が落ちてきた。

「それ……」

本城が拾おうとすると、佳代は覆いかぶさるようにして紙を拾った。

紙を入っていたポケットにしまい、佳代は立ち上がって洋輔のほうへ顔を向けた。

「じゃあね、先生」

小さい声で言うと、目を伏せながら佳代は保健室を出て行った。本城は手を伸ばして佳代を止めようとしたが間に合わず、がっくりと肩を落とした。

「くそっ！」

悪態をついて、本城は洋輔のほうへ顔を向けた。

その表情は何か言いたげであったが、結局何も言わないで保健室を出て行った。その後姿は、どこか寂しげであった。

佳代と本城は付き合っていたのだろうか。しかし、佳代は本城に対して、理由は分からないが怒りを抱いていた。赤の他人だと、佳代は躊躇うことなく洋輔に言っていた。

解せないことはたくさんあるが、今は関係ないだろう、そう自分に言い聞かせ、洋輔は座っていた椅子のほうへ体を向けると、視界にコップを持っている松平の姿が映った。

「あ、先生。見ていたんですか？」

意味ありげな微笑を浮かべながら、松平は洋輔に近づいてくる。「邪魔しちゃ悪いと思ってね」

洋輔は、その言葉の意味を理解するのに時間はかからなかった。

「二人は付き合っているんですか？」

興味なさそうに素っ気なく訊いたが、内心では知りたくて仕方がなかった。

「いや、違うと思うよ」

松平の答え方も素っ気無かった。

「違うんですか？」

「多分ね」

思わず聞き返してしまった洋輔に、松平は訝しげな眼差しを向けた。

「いや、ほら、なんかそんな雰囲気があったから」

慌てる洋輔に、松平はにやけながらコップを差し出した。

「よかったな」

「何がですか？」

松平が何を思ってたと言ったのか、本当は洋輔自身も分かっていたはずだ。けど、それを認めたくない自分がいた。

「佳代ちゃん、男友達いるからなあ」

聞き流そうとしたが、無理だった。

「さっきの彼、ええっと……そうだ、本城君とも仲いいし、それと誰だったかな、凄い頭のいい子……やっぱ思い出せないわ」

無理に思い出そうとして頭を悩ませている松平を尻目に、洋輔は佳代のことを思い浮かべため息をついた。所詮、自分と佳代は、教育実習生と生徒の関係なのだろうと。

「そういえば、君は佳代ちゃんと仲がいいのかい？」

「え？」

思わず声をあげてしまったのは、心の奥に秘めているものを松平に見透かされたからだと思ったからだ。

しかしすぐそれを打ち消し、松平の質問に答える。

「まあ、仲いいかは分からないですけど、彼女のほうから声をかけてきてくれて、少し話したんです」

「なるほどな」

どうやら、松平は納得の様子だった。

「この学園では珍しいくらい、明るい子だ」

松平の言うとおり、彼女の明るさはこの学園に似つかわしくなか

った。実際、洋輔は教育実習生として今日、この学園を訪れてから生徒たちが仲良くお喋りをしている風景を見ていない。皆、人と接することを嫌い勉強ばかりをしていた。正直、洋輔はうんざりしていた。せめて楽しく、教育実習をしたかったのだ。そう思っていた矢先に、彼女と出会った。洋輔は少し救われた気がした。

佳代に特別な感情を抱いていることは、言うまでもないだろう。だが、洋輔はそれを決して認めはしなかった。そんな不純な動機から、教師になったと思われたくないからだった。

「保健室にも、前は時折顔を見せてくれる程度だったが、最近はよく来てくれてね。私の話し相手になってくれてるんだよ」

頷きながら、洋輔は松平にかすかな嫉妬を感じていることに気づき、自分を叱咤した。

「けど、彼女の様子少し変じゃなかった？」

「変ですか？」

佳代の普段をあまり知らない洋輔に言われても、答えられるわけがなかった。まさか松平は、自分の気持ちを知ってわざとこのような質問をぶつけたのではないか、そのような疑いを洋輔は向けた。

私は、普段の彼女のことを知っているよ――。

松平の目は、そう言っているような気がした。

「なんか、いつもと違うような」

やっぱりだ。洋輔は冷ややかな気持ちで松平を見つめた。

「けどさあ、普通人が死んだくらいであんな泣くかねえ」

「さあ」

洋輔は素っ気無く返し、さっさと薬を飲んでこの保健室を出て行くとした。

一錠の錠剤を口に含み、水でそれを無理やり体の中に流し込む。松平はその動作に目をくれず、なにやら腑に落ちない点をあげているようだった。

「なんであんなに泣くのかな。やっぱり死体を見ると、悲しいのか。彼女だったら、泣くのか。けど……」

コップをテーブルに置いて、保健室を出て行く準備を始めると、松平は声をかけてきた。

「ねえ、やっぱり佳代ちゃんに限らず、普通の女の子であればショックで泣くのかな？」

佳代に限らずというのと、松平の目がいつそう真剣になったので、洋輔は少し答える気分になった。

「そう言われると、そうですね」

洋輔は、死体を見ていた時の生徒たちを、脳裏に思い浮かべていた。

死体を囲んでいた生徒たちは狼狽を浮かべていたが、涙を流している者はほとんどいなかった。女子は、何人か嗚咽を漏らしていたが、佳代みたいに号泣している者はいなかった。

あれが彼女だといわれればそれまでだが、普通に考えれば、誰か分からない死体を見ただけで目を赤くするほど泣く者はいない。

「私の、気にしすぎかもしれないけどね」

そう言って、松平は重くなった空気を和ますかのように笑いながら言った。つられて、洋輔も笑った。

けど、心中は穏やかじゃなかった。

松平のおかげで、佳代という女の子のことをもっと知りたくなってしまった。

その中には好意というものもあるが、それだけじゃない。松平が口にした疑問が、洋輔の中でも引っかかっていた。

「薬、ありがとうございます」

ここで長く考えていても仕方がない。洋輔はお礼を言って、足早に保健室を出て行った。

見送ると、松平は静かになった保健室を見渡し、そして佳代たちが来る前までやっていた実験を再開するため、奥の部屋へと消えた。

第三章

現場にいた者たちは、警視庁からやってきた刑事たちによって食堂に集められていた。集められた生徒たちは、こんな状況にも関わらず勉強に励んでいる。

食堂は第三校舎の二階にあり、全校生徒が食事をできるようにかなり広く設計されていて、お互いが向き合う形で作られた、百人座れる長テーブルが縦に六列並べられている。集められたのは三十人で、一つの長テーブルに間隔を空けて座らされていた。

洋輔は貧乏ゆすりをしながら、腕時計に目を落とした。

時刻は、六時を回っていた。集められてからすでに一時間近く経過しているが、それきり刑事たちは食堂に姿を現さない。色々と調べることもあるのだろうと、洋輔は無理やり自分を納得させようとしたが、一向に収まることのない吐き気と若干の眠気がそれを妨げていた。

松平からもらった薬を飲んでも吐き気は収まらず、むしろ飲む前よりも悪化しているように感じ、さらに眠気も襲ってきているのだ。市販だからといって、やはり他人からもらった薬は飲むものではないかと、洋輔は学んだ。

洋輔は背もたれに背中をうずめると、長テーブルを見渡した。

食堂に集められてから、時間がもったいないとばかりに集められた生徒達が勉強をしている。

この状況で、よく勉強してられるよな――。

軽蔑の眼差しを向け、胸中で洋輔は呟いた。

不意に佳代のことが心配になった洋輔は、一番奥のほうへ座っている佳代のほうへ顔を向けた。両手で顔を覆い、リズムよく肩を動かしている。佳代が負った心の傷は相当深いようだった。

と、ここで洋輔は松平に言われた一言を思い出した。

佳代の様子が変わではないかと、松平は指摘していた。確かにその言葉には、納得のいくところがあった。

あの死体を見てから、彼女はずっと泣き続けていた。何に対して泣いているのか、洋輔にはもはや分からなかった。

死体を見たショックから泣いているのか、それとも……。

「皆様、お待たせしました」

六時三十分——ようやく、二人の刑事が警察手帳を掲げながら食堂に姿を現した。

「警視庁捜査一課の、館林と申します」

「同じく警視庁捜査一課の、海藤と申します」

館林と名乗った男は、いかにもベテランという風格を漂わしていた。素人の洋輔にも、只者ではないと分かる。短髪で、端正な顔立ちをしている館林は、実年齢よりも若々しく見えた。

一方の海藤という男は、少々肥満気味で、スーツを身軽に着こなしている館林とは違い、ラフな格好をしていた。それが、洋輔に不快な印象を与えた。

「すみません。調べたいことがたくさんあって、時間がかかってしまいました」

「調べたいことって、あれは自殺じゃないのですか？」

一人の男子生徒が、勉強している手を止め挙手をして発言した。

「ええ。その可能性は大きいと思います」

にこやかな表情で、館林は答えた。

洋輔は再度、佳代のほうに視線を向けた。依然として佳代は、両手に顔をうずめたままだった。

おそらく館林たちは、死体についての情報を自分たちに話すだろう。佳代は、その情報を聞くのが辛いはずだ。これ以上、佳代の泣いている姿は見たくない——。

そう思い立ち上がった洋輔は、抗議するため館林のほうへ顔を向けて言った。

「これ以上、僕たちを拘束しないでください」

「はい？」

腹の底から声を出したつもりであったが、死体を見た時からの吐き気のせいで、上手く声に出すことが出来なかった。

仕舞いには、その場に倒れてしまった。

「大丈夫ですか！」

海藤が、その巨体を揺らして洋輔に近づいてくる。館林も、心配そうな眼差しを洋輔に向けている。

「館林さん、凄い熱です」

海藤は、洋輔の額に手を当ててから言った。

「どうしたんだ」

先ほどまで静寂に包まれていた食堂は、一気にざわつき始めた。周りの生徒たちは、口々に何か呟いている。

「どうしましたか？」

館林は洋輔のそばまで行くと、洋輔の頬にそつと手を当てて、すぐ離れた。

「病院に連絡だ」

いよいよ大事になってきた。海藤はポケットから携帯を取り出し、病院へ連絡を入れた。館林は、動揺する生徒たちを落ち着かせる役目に徹していた。

「大丈夫です。きっと、助かります」

数十分経った頃にサイレンの音が遠くから聞こえてきた。サイレンの音を聞いて、洋輔は薄れ行く意識の中、ようやく事態を把握し、胸中で呟いた。

俺、運ばれるんだ――。

目を覚ますと、病院独特の香りが鼻につき思わず顔をしかめた。大人になっても、この匂いには慣れないなど、洋輔は心の中で自嘲した。

しばらく朦朧としていた意識だが、徐々にはっきりとしてきて、やがて両腕に激痛を感じるようになった。

激痛の正体を確かめるため両腕を上げようすると、右腕が何かに引っかかり動かすことが出来なかった。

顔を右に向けると、包帯を巻かれた腕に点滴がさしてあった。同じく左腕にも包帯が巻かれていて、洋輔の不安は煽られるばかりだった。

色々この状況について聞きたいことが山ほどあったが、あいにくここは個室で、周りには誰もいないため、知ることは出来なかった。

それにしても、何故自分は病院に運ばれたのだろうか。その疑問が、真っ先に脳裏をよぎる。

普通に考えればおかしかった。死体を見て気持ち悪くなって倒れたとはいえ、病院に搬送され、両腕に包帯を巻かれて点滴がさされているという状況になるはずがなかったからだ。

今思えば、体調が急激に悪化したのは保健室を出てからである。

保健室にいた時、自分の身に何かあったのだ。

病院に搬送される理由を決定付けた、何かが。

「目が覚めましたか」

思案する間もなく、病室に二人の男が入ってきた。警視庁からやってきた、館林と海藤だった。

「随分、苦しそうですね」

洋輔のこの状態を見て、海藤はそう発した。口調には、デリカシ一の欠片も込められていなかった。

隣の館林のほうへ目をやると、まるで洋輔の姿など目に入っていないようで、思索にふけっているように見えた。

「しかし、驚きました。いきなり倒れたんですもん」

洋輔は、海藤という男にあまりいい印象は持っていなかった。口調といい、その格好といい、腹立たしさが湧いてくる。が、当然そのようなことは口に出せず、代わりに目で訴えていた。

海藤はそれに気づく様子もなく、べらべらと喋り始めた。

「瀬郷洋輔さんでしたっけ。聞きましたよ、職員の先生から。あな

たはあの城東大学に通っているんですってね。なかなか優秀じゃないですか。まあ、優秀じゃなければ宝徳学園の教育実習生なんて務まらないですもんね。本当、すごいです。けど、ついていませんよね。初日からこんな事件が起きちゃ。大学に戻ることになっちゃうんですかね」

我慢できなくて、助けてもらうつもりで館林へ視線を向けた。

しかし館林は全く気づかず、依然として考えを巡らせているようだった。

館林にとって何か引かかることでもあるのだろうか、そう思い始めた洋輔の耳には、最早海藤の言葉など耳に入ってこなかった。

「僕も教師になりたいと思った時期はあったんですけど、高校二年生のときに転機が訪れましてね。警察官に助けてもらったことがあるんですよ。落し物を届けてくれたんです。警察官って意外といい仕事なのかもな、って思い始めて、そしたら決断するまで早かったですね。大学への進学も当時は考えていたんですけど、僕は警察官になろうと思って――」

「ちよつといいですか？」

館林は強引に話を遮り、洋輔のほうへ顔を向けた。海藤は話を邪魔されたことへの不快感を隠そうとはしなかった。

「すみません、お疲れのところ。状況を軽く説明してから、一つ質問をさせてください」

海藤の話を永遠されるよりかは、館林の質問を受けていたほうがはるかにまじだった。

「医師の方に無理を言って面会をさせてもらっている状況なんで、手短にすませますね」

館林の言い方には、暗に海藤への非難が込められていた。

「この三日間で分かったことが一杯あるんですよ」

「三日間？」

洋輔は思わず聞き返した。

「三日間も僕は眠っていたんですか？」

「まあ、そう……なるんですかね」

歯切れの悪い返答に、洋輔は首を傾げた。

「非常に危険な状態だったと、担当の医師から聞かされました」
脱力してしまった洋輔を尻目に、館林は続けた。

「あなたは第三校舎にいたそうですね」

力なく、洋輔は頷いた。

「中庭に向かった際、誰かと会いませんでしたか？」

「誰か？」

館林の質問の意図が分からず、洋輔は首を傾げて呟いた。

「とくに誰も見ませんでしたけど……」

と、ここで洋輔はようやく館林の考えに気づいた。あの思案顔も、これで合点がいく。

「もしかして館林さんは、これを自殺じゃないと考えているのですか？」

洋輔の鋭さに館林は少なからず動揺を見せたものの、刑事というだけあってすぐに立て直した。

「詳しいことはお話できません」

本心から発せられた言葉だった。これ以上は、いくら粘ってもきつと話してくれないだろうと、洋輔は潔く諦めた。

「目が覚めたとはいえ、まだ絶対安静なんですから。また後日、お伺いします。その際、他の方々に提示した情報はお話します。それと、あなたの身に何が起こったのかも」

そんなことを言われても、落ち着いて眠れそうになかった。この三日間、何があったのか。何故警察は他殺の可能性も視野に入れているのか。

きっと、自分以外の現場にいたものはある程度の情報は聞かされているのだろう。高熱で倒れさえしなければ、こんなもどかしい気分など抱かなくてもすんだのにと、洋輔は後悔していた。

「それでは、また。お大事に」

言うと、館林は足早に病室を去っていった。海藤は、さきほど話

を遮られたのをまだ根に持っているのか、不機嫌さを露にして館林の後に続いた。

洋輔は枕に頭を押し付けて、ゆっくりと瞼を閉じ、これからのことを頭に思い浮かべた。

当然だが、教育実習は中止になるだろう。生徒の自殺騒動が起り、その上高熱で倒れてしまい、教育実習どころではなくなってしまった。数ヵ月後には、平凡な大学生活を再開しているに違いない。そう思うと、気が滅入ってくる。

一度でいいから、生徒たちに授業してみたかったな――。

洋輔は、胸中で呟いた。

悔しかった。何も出来ないのが非常に悔しくて、情けなかった。けど、どうすればいい。宝徳学園はおそらく休校になり、洋輔は大学へ戻ることを余儀なくされる。

自嘲気味に、洋輔は笑った。

どうしようもないじゃないか。

保健室で何があったのか考えるのを忘れ、洋輔は悔しさのあまり声を押し殺して涙を流した。

第四章

数日後、洋輔は順調に回復していき、包帯もとれて自力で歩けるようにまでなった。

「よかったですね、瀬郷さん。あともう少しすれば、退院できますよ」

早朝、洋輔の病室にやってきた担当医師の長谷川は、快活な笑顔を浮かべて言った。

「もう少し時間かかると思っていたんですけどね」

長谷川の口調は、本心から喜んでるように感じられた。それが、洋輔にとっては嬉しいことだった。

長谷川は医師になって日は浅いが、それ故に患者のことを一途に思える、汚れていない純粹な心を持っていた。年もそれほど離れていないため、洋輔は長谷川という医師に対して親近感を抱いていた。「本当にありがとうございます」

洋輔も、本心からお礼を言った。

「いいいえ。けど油断しないでくださいね。まだ退院ではないんですから」

長谷川の釘を刺すような言い方も、洋輔は許せていた。

「じゃあ、長谷川先生。そろそろ教えてくれますよね」

洋輔がそう切り出すと、途端に長谷川の表情は曇り始めた。

「そう……ですか」

狼狽を露にして、長谷川は狭い病室を見回している。

「駄目ですか？」

今日こそ引き出してやると、洋輔は心に固く誓っていた。

退院が間近に迫っているのだ。訊くチャンスは、もう残りわずかだ。教えてくれないというのなら、いくら相手が長谷川でも暴れてやる覚悟でいた。

「分かりました。隠していても仕方ないことですし」

ようやく長谷川は、洋輔に話す覚悟を決めた。ずっと粘った甲斐があったと、洋輔は胸中で呟いた。

数日前、刑事たちがここを訪れてから洋輔にはずっと引っかかっていたことがあった。

自分の両腕に巻かれている包帯は、一体何なのか。

食堂で、気分が悪くなり倒れたというところまでは覚えていたが、それ以後の記憶は全くないのだ。倒れただけで腕に包帯が巻かれたとも考えられない。ということはつまり、寝ている間に何かあった、もしくは無意識のうちに何かしていたということになるのだ。

それが分かれば、大分原因を絞り込めるはずだ。

それらのことについて、洋輔は毎朝、長谷川が病室にくるなり訊いていた。しかし長谷川は答えようとせず、ずっとはぐらかしてきただのだ。

今になって、長谷川はその質問に答えてくれようとしている。退院が間近に迫っているので、喋ってくれる氣にでもなってくれたのだろう。

「僕からはあまり言いたくなかったんで、ずっと隠してきたんですが。まあ今日、刑事さんもお見えになるそうなので、どうせ知ることになるでしょうから僕からご説明します」

刑事がやってくるというのは、初耳だった。そのことも、洋輔を動揺させないための親切心から隠していたのだろう。

「まず一つ、お聞きしたいことがあるんですが、いいですか？」

「はい」

洋輔は、並々ならぬ緊張感を感じ取って、思わず生唾を飲み込んだ。長谷川の表情には、いつも浮かべている笑顔はなかった。

「単刀直入に窺います。倒れた当日、何か変なものでも口にしましたか？」

「変な物？」

瞬時に、養護教諭の松平からもらったあの薬を思い浮かべた。

「変な物っていうか……強いて言うなら、薬ですかね」

「薬？」

「ええ。僕、自殺死体を見たときに気分が悪くなっちゃって、保健室へ行ったんです。そしたら、養護教諭の松平先生が薬をくれて」

「どのような薬ですか？」

「吐き気を抑えるための薬、って言っていました」

洋輔は、他人から受け取った薬を飲むかどうか最後まで悩んだが、松平の厚意を無下にすることもできず、結局飲んでしまった。

予感があったが、やはりあの薬がいけなかったというのか。

「他人から、薬を受け取って飲んだと言うのですか？」

長谷川は咎める口調で言った。

「いや、僕も最後まで悩んだんですけど……」

言い訳をしようとしたが、途中で言葉に詰まってしまった。

つまり、こうなったのも全て悪いのは自分なのだ。言い訳を並べても仕方ない。

「そうですか」

長谷川の目は険しかったが、洋輔をこれ以上責めるつもりはないようだ。長谷川の関心は、すでに別のほうへあった。

「あの、どうかしました？」

重苦しい沈黙に耐え切れなくなった洋輔は、長谷川の目を覗いて言った。

「……けど、ありえない……」

深刻な顔をして、長谷川は一人で思案していた。時折聞こえてくる長谷川の呟きの意味を、洋輔は知りたくて仕方なかった。

「……薬は、関係ないのか……」

数分、長谷川は頭の中で推理を展開していたが、自分なりに納得したのか、二三度頷いてから別の話題を洋輔にふってきた。

「巻かれていた包帯について、お話ししよう」

長谷川は、以前包帯が巻かれていた洋輔の両腕に目を落とし、言った。

「どうして包帯が巻かれているのか、理由を説明されなかったから、

気になったことでしょう」

「誰も説明してくれないんですもん」

ふてくされたように、洋輔は言った。

「ええ。言わないほうがいいという、我々の配慮です」

どうりで誰も教えてくれなかったわけだと、洋輔は一人納得した。

「それじゃあ、この包帯は？」

ついに疑問が解消される喜びと、実はそれを知るのが怖いという不安が入り混じり、洋輔は複雑な心境で恐る恐る問うた。

「暴れたんですよ、瀬郷さん」

「暴れた？」

言葉の意味が解せなくて、思わず洋輔は訊きかえした。

「暴れたって、どういうことですか？」

「瀬郷さんは意識不明の重態で、こちらに搬送されてきました。我々が診察している最中に目を覚まされて、急に暴れだしたんです」

長谷川は真剣な表情で話しているが、洋輔にはどうしても信じる事が出来なかった。

「僕には暴れた時の記憶は一つありません。無意識で暴れていた、って言うことなんですか？」

「そう考えるのが、自然でしょう」

洋輔は、まだ半信半疑な気持ちだった。

「瀬郷さんの両腕に巻かれている包帯も、暴れた際に怪我をしたためです」

言われて、洋輔は両腕に目を向けた。

確かに辻褄は合うが、それでも納得のいかない部分が洋輔にはあった。

「けど、今までにそんな症例あるんですか？」

「私が受け持った患者さんの中に、そのような人は一人もいませんでしたが、前例としては、薬物中毒者の方が突然暴れだすという……」

最後のほうは言葉を濁して、長谷川は言った。

「俺、薬物中毒者と一緒ですか？」

怒りを押し殺しながら、洋輔は言った。

「いえ、そんなことはありません」

慌てて、長谷川は否定した。

「診察した結果、瀬郷さんに薬物反応は出ませんでした。私は、あくまで前例をあげただけですので、瀬郷さんを薬物中毒者だなんて思っておりません」

必死に弁解する姿が、洋輔には滑稽に見えた。

「いいですよ、もう」

冷めた気持ちで言うと、洋輔は気持ちを紛らわすため、窓に映る景色に目をやった。中庭を一望できるこの個室を充てられたことは少なからず感謝していた。

「あれ？」

中庭をこの病棟に向かって歩いてくるスーツ姿の男が見えて、洋輔は思わず声を上げた。

「どうしました？」

長谷川は立ち上がって、窓の近くまで行き外へ目をやった。

「あ、刑事さんですね」

その口調には、どこか安堵した響きが込められていた。

「それじゃあ、私は刑事さんを迎えに行きますので。しばらくお待ちください」

「はい」

洋輔は刑事が見えなくなった中庭に目を向けながら、返事をした。後ろで、ドアが閉まる音が聞こえてきた。

「お待たせしました」

しばらくすると、長谷川の声とともにドアが開かれる音が聞こえてきた。振り返ると、長谷川の後ろに館林の姿が見受けられた。

「お久しぶりですね、瀬郷さん」

愛想よく館林は挨拶したが、その目は笑っていなかった。

「僕の代わりに説明してくださいね」

長谷川は館林に小声で言った。館林は頷きながら、横目で洋輔の姿を捉えていた。

「分かりました」

一言そう言うと、館林は長谷川に退室を促した。それに従い、長谷川は足早に病室を後にした。

館林は人の笑顔を浮かべて、さきほどまで長谷川が座っていた椅子に腰を下ろした。

数分間、お互い無言のまま見詰め合っていたが、やがて館林が沈黙を破った。

「長谷川先生は、あなたに巻かれていた包帯のことを話しましたか？」

椅子に腰を下ろしながら、館林はゆっくりとした口調で言った。

「包帯は、僕が無意識のうちに暴れて、怪我したから巻かれたんですよね？」

確認を取る口調で、洋輔は言った。

「ええ。その通りです」

「僕が暴れた原因というのは？」

「それはまだ、はっきりと分かっていません」

館林の口調からして、何か隠しているとは思えなかった。

「分かりました」

半ば失望するような気持ちで、洋輔は言った。

「けど、私が今日訪れたのは、そのような話をするためではありません」

刑事の言葉に興味を惹かれ、洋輔は館林のほうを見た。

「事件の説明です」

途端に、洋輔の動機が激しくなった。

「あなたも知っておかなければならない。学園の生徒が飛び降りた事件のことを」

そのことはずっと知りたかった。しかし、この病室にはテレビがなく、出歩いてテレビのある待合室に赴いても事件のことはすでに

報道されていないのだ。新聞も読まないため、事件の知識は皆無だった。

まさか、刑事から直接話を聞けるとは。洋輔にとって願ってもないことだった。

「最初から、説明しますね」

洋輔は、館林の言葉に身を乗り出して頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8691z/>

受験戦争

2011年12月28日15時50分発行